file.02

Color coordination

部屋のカラーコーディネート術

部屋のインテリアを考えるときに注意したいのが、色の感じ方や見え方です。上手にカラーコーディネートされた部屋は美しく、居心地がよいものです。今回はインテリアのカラーコーディネートについて考えます。

カラーコーディネートのポイント

インテリアでは1色だけを使うことは少なく、複数の色を組み合わせることになりますので、配色の効果を考えましょう。色の基礎知識と「どんな色」を「どこ」に「どれ位の分量」で「どんな風」に使うのか、このポイントをしっかり押さえてコーディネートすると上手くいきます。いくつか配色方法はありますが、色を次の3つに分けて考えると計画がたてやすいでしょう。

アソートカラー

空間の中で印象付けたい色。25%くらいの分量で、カーテンやアクセントウォールなど目につきやすい位置に用います。

ベーシックカラー

アソートの背景となる色で 70%くらい。広い面積の床や壁などに使います。

アクセントカラー

空間を引き締める役割があり、5%を目安に強い色を、クッションなどに用いると変化がつき美しくまとまります。

更に、部屋は生活する場所なので、イメージだけでなく、目的や条件を整理していくと色でどんな工夫が必要かわかってきます。例えば、北向きの部屋であれば寒々しく感じる色の採用を避けて、狭い部屋であれば広く見えるような白系統の明るく薄い色のカーテンや壁紙を取り入れることなどが考えられます。

色で部屋の感じ方や心理的効果が変わる

色は色相や色調によって印象が異なります。全体的にベージュやアイボリー系の色を使うと、明るく穏やかな印象の部屋になるでしょうし、グレーやブラックを用いることによってモダンな雰囲気を演出することができます。ローズのような赤系を取り入れれば、女性らしい雰囲気をつくることもでき、グリーン・ブルー系にすればクールで知性的な印象になります。

気持ちが高ぶる色と落ち着く色もあります。赤やオレンジは興奮色。赤系のカーテンを取り入れるときは、人が集まるリビング・ダイニングなどへ。オレンジは食欲増進効果もあります。反対に青は沈静色と呼ばれ、落ち着いて過ごしたい書斎やゆったりとした眠りが求められる寝室などにぴったりです。

色には、膨張や収縮して見える効果があります。ペールトーンや白など明度の高い色（膨張する色）は大きく広がって感じ、ダークトーンや黒など明度の低い色（収縮する色）は小さく感じます。天井や壁、床の色を頻繁に変えることはできませんが、もし部屋の雰囲気を変えたくなったときはソファやカーペット、カーテンの色で調整するといいでしょう。

例えば、同じ大きさのソファでも色によって大きさの感じ方が変わります。狭い部屋に大きく見える白のソファを置くと窮屈に感じやすいので、セレクトのときには寸法だけでなく、色の見え方も考慮するようにしましょう。

また、近くに感じたり遠くに感じたりする色があります。赤、橙、黄などの暖色で明度彩度が高いと距離が近く感じ（進出色）、青、青緑など寒色で明度彩度は低いほど距離が遠く感じるでしょう（後退色）。赤、橙、黄などの進出色を壁紙など広い面積のところへ用いると壁が迫ってくるように感じ、部屋が狭く見えますから注意しましょう。逆に、そのような色をワンポイントとして使うと、部屋のアクセントとしての効果が高くなります。

コーディネートで注意したい色同士の影響

インテリアの色には、人に目の錯覚を引き起こす作用もあります。この特性を理解して上手に活用しましょう。

明度対比について

明るさの違う色同士の配色では、明るい色はより明るく見えて、暗い色はより暗く見えます。左右とも内側は同じグレーなのですが、黒を背景とした左のグレーのほうが明るく感じますよね。

例えば、ダークカラーのソファにクッションを置くのであれば、そのソファよりも少し明るめのクッションを置くと明るく引き立って見えてきます。

色相対比について

異なる色相の配色は、それぞれの色味の差が大きく感じられます。左右とも、中央の紫は同じ色なのですが、色味が違って見えますね。色には、色相が違う色を同時にみると、それぞれの色味の差が大きく感じられるからです。赤紫を背景とした紫は青みが増して見え、青を背景とした紫は、赤みが増し赤紫のように感じるのです。

例えば、お気に入りの紫色のソファがあるとしましょう。模様替えのときに、ソファの背景にあるカーテンを青い色に変えると、赤紫のような色に見えるのです。

彩度対比について

異なる彩度の配色は、彩度の高い色はより鮮やかに、彩度の低い色はより鈍い色に見えます。両方とも同じピンクなのですが、薄いピンクを背景としたピンクの方が、赤を背景にしたものより、鮮やかに見えてきますね。彩度が違う色同士を組み合わせると、彩度の高い色はより鮮やかに、彩度の低い色はよりくすんで見えてきます。

例えば、優しく可憐なイメージの部屋にぴったりだと思ったピンクのクッションが、置く場所の色によっては、派手な印象になってしまうということもあるのです。

参考記事：
色の基本は色彩の達人への第一歩　https://allabout.co.jp/gm/gc/25562/
センスが伝わる！ インテリアのカラーコーディネート５つのコツ
https://allabout.co.jp/matome/cl000000003554/
快適で美しい部屋のための色彩計画　https://allabout.co.jp/gm/gc/25436/
ライティング～照明について　https://www.murauchi.net/culture/cordinate/lighting.html

色にも重さ（重厚感と軽快感）がある？

色には、どっしりと重く感じられる色や軽く感じる色があります。

ダークトーンや黒など明度の低い色は土や石など重いものを連想させて、重くどっしりとした印象を受け、ペールトーンや白など明度の高い色は空や雲などを連想させて、ふんわりと軽く感じます。

インテリアコーディネートでは、天井を一番軽く感じる色にして、壁から床へと下にいくにつれて重く感じる色を使うと安定感がでます。ですから、どっしりとした重厚な雰囲気を演出したいときは重量感のある色を、逆に、軽快な雰囲気を出したいときには軽さを感じる色を使うと良いでしょう。

光と色の密な関係

私たちは光がないと色が見えません。物体に光が当たり、その反射光を見ることで色を認識します。ですから光と色はとても密接な関係があります。

例えば、西日は赤みが増して見えますので、薄いオレンジ色のブラインドのつもりが、夕方になると濃いオレンジ色に見え、さらに光が反射して部屋全体がオレンジ色になり暑苦しく感じることも起こります。

室内で使う照明の光色によっても色は違って見えます。

ショールームとご自身の部屋の照明の光色が異なると、カーテン等の色合いも違って見えるので、できるだけ同じ光色で確認するのをおすすめします。

今回のご説明は極めて基礎的な情報です。さらに深く、本格的なインテリアのカラーコーディネート術を習得したいと思った方や興味を持った方は、講座等を受講してみてはいかがでしょうか。

監修者：鈴木 理恵子（すずき　りえこ）

インテリアコーディネーター、2級建築士、福祉住環境コーディネーター。大手住宅メーカーでインテリアコーディネートや社内インテリア教育を担当。書籍や新聞・雑誌にて、インテリア関連のコラムなどの執筆活動をしている。